

中国西周王朝における馬利用形態の解明 — 陝南地方を中心に —

菊地大樹

京都大学大学院人間・環境学研究科 博士課程
(現 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 客員研究員)

丸山真史

奈良県立橿原考古学研究所 嘱託
(現 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 客員研究員)

緒言

殷代後期から導入されたと考えられるウマの生産管理は、西周時代にはいと黄河流域に沿って各地で展開されるようになる。陝西省南部の陝南地方は、西周王朝の都が位置した地域として、長きにわたり調査研究がすすめられてきた。本研究で対象とする少陵原遺跡は、西周時代前期から後期にかけての墓地遺跡であり、西周王朝の都と想定される地域のひとつ、陝西省西安市長安区に位置する。2004年10月～2005年10月にかけて、陝西省考古研究院により発掘調査がおこなわれ、西周墓葬429基、殉馬坑3基および仰韶時期の灰坑12基が出土している¹⁾。報告によると、3基の殉馬坑からは計10個体のウマが出土しており、保存状態は概ね良好である(図1)。そのため、動物考古学的分析法を十分に発揮することができ、西周王朝におけるウマの飼養管理形態を復元するための貴重なデータ集積が期待される。

本研究では、動物考古学的分析から得られた成果に、他の考古資料・出土文字資料・古典籍という多様な情報を加味し、家畜管理技法の人類学的分析方法を考古学に積極的に応用していくことで、多角的な視点から西周王朝におけるウマの利用形態の復元を試みる。



図1 少陵原西周墓地出土ウマ遺存体

調査・分析方法

調査にあたっては、まず各部位の同定作業をおこなったあと、計測と記録写真を撮る。各部位の計測には、Drieschの計測方法²⁾が、動物考古学および現生動物の計測法として世界的に広く使われている。中国における概刊の報告書を見ると、計測法が記載されていない場合が多い。斉一的なデータの集積や、他の遺跡の出土例との比較を可能にするためにもこの標準的な測定法を使用する。その後、得られたデータから分析をおこなう。分析では、推定体高、推定年齢、性別、使用痕などの特徴を把握する。

体格推定では、在来馬の各部位の最大長の計測値から、体格を推定する方法が日本では考案されており^{3,4)}、発掘資料でも応用されている。中原の黄土土壌はアルカリ性のため、酸性土壌の日本よりも骨の劣化が遅い。そのため骨の保存状態が良く、骨端まで完全に残っていることが多く、より正確な復元が見込まれる。

年齢推定では、永久歯の萌出と咬耗度の状態から求められる。ウマの歯は、完全に萌出し、咬耗が開始される時点が最も長く、年齢とともに磨耗していく。遺跡からは臼歯が出土することが多く、臼歯を測定することが有効とされ、一般的に歯冠高を計測し、咬耗状態により年齢を推定する方法がとられている^{4,5)}。また、各部位の骨端部における癒合の状態からも、幼獣か成獣といった大まかな年齢推定が可能である。家畜を管理する際、一般的にオスは若い段階で食肉のために処理され、メスは繁殖のために年齢層が高い傾向にある。年齢構成を分析することにより、どのように家畜が管理されていたかを明らかにする。

性別推定は成獣に限る。ウマは犬歯がオスのみに存在することから、犬歯の有無が性判定査定の有効な手がかりとなる。さらに、同年齢で体格に差があらわれているオスについては、去勢の存在が疑われる。家畜管理形態

をみるうえで、オスとメスの比率は重要な要素である。一般に子供を生むメスは寿命が長く、オスは食肉のために若くして殺されるため、オスとメスの構成比は家畜の飼養形態をみるうえで重要な要素となる。

最後に使用痕の観察である。乗馬用のウマにはハミが必要であり、ハミ留めを第二前臼歯前方につけて使用する。ウマの第二前臼歯を観察することにより、ハミの使用痕跡をみいだせる可能性がある。殷墟遺跡を例にあげると、ウマの埋葬には戦車とともに埋葬された車馬坑と、ウマを単独で埋葬した馬坑に大きく分けることができる。馬具がともなっていない場合においても、使役に用いられていたかどうか、第二前臼歯の形態的特徴の差に留意し、生前の利用形態を推測する。

結 果

2010年9月1日から9日にかけて、中国陝西省西安市郊外にある、陝西省考古研究院の遺物保管倉庫にて少陵原遺跡出土馬骨の調査をおこなった。現地では、まず各部位の同定をおこなったのち、計測と写真撮影をおこない記録をつけた。得られたデータについては、現在所蔵機関と発表方法について協議中のため、本報告での公表は差し控えるが、1号坑から3号坑におけるウマの特徴については、次のとおりである。

1号坑には計6個体が埋葬されており、年齢推定では幼獣と若獣が確認され、中型馬であった。2号坑には、幼獣と壮齢が2個体埋葬されており、壮齢馬の体高は中型馬となる。3号坑には、ともに老齢馬が埋葬されており、推定体高はこちらも中型馬におさまる。このように、少陵原西周墓地に埋葬されたウマは、体高が中型馬に属する。Ⅲ区の1、2号坑に埋葬されたウマは、幼獣の個体に若齢または壮齢のオスの個体がともなって埋葬されているが、Ⅴ区の3号坑については、2個体とも老齢で

あった。

考 察

分析内容の詳細な発表については、現在所蔵機関と協議中のため、本報告ではおこなうことができないが、これまで報告されている内容をふくめ考察をのべる。

少陵原西周墓地の馬坑は、墓葬区のⅢ区(中区)から1号坑と2号坑、Ⅴ区(東区)から3号坑の計3基が検出され、そこから計10個体のウマが出土している(図2)。

これまで西周時代のウマについては、早期の北京市琉璃河遺跡⁶⁾、早期から晩期の山西省天馬-曲村遺跡⁷⁾、晩期の河南省上村嶺虢国墓地遺跡⁸⁾から出土したウマの分析があげられる。琉璃河遺跡車馬坑に埋葬されたウマは、推定体高が133~143cm⁹⁾、天馬-曲村遺跡のウマの推定体高は120~141cm、推定年齢は8歳~11歳であり¹⁰⁾、虢国墓地遺跡のウマの推定体高は135~146cm⁹⁾となる。

西周時代におけるウマの体高をみてみるとすべて中型馬であり、本資料のウマも中型馬の体高域におさまる。しかしながら、埋葬されたウマの年齢をみてみると、幼獣個体がみとめられることは注目しなくてはならない。これまで西周時代において、ウマの犠牲年齢についての報告事例はなく、幼獣が埋葬されたと確認できるのは、山西省天馬-曲村遺跡⁷⁾や河南省鄭韓古城遺跡の祭祀坑¹¹⁾にみられる戦国時代以降の事例からとなる。そのため本遺跡の報告は、西周時代のみならず、中国古代におけるウマの犠牲を考えるうえでも貴重な事例となりうる。

少陵原西周墓地の年代は西周早期から晩期とされる。残念ながら3基の馬坑からは供出遺物がほとんどなく、3基の馬坑の詳細な時期を判断することは難しい。そのため、Ⅲ区の1、2号馬坑とⅤ区の3号馬坑それぞれの埋葬形態が異なる点が、どのような要因によるものか

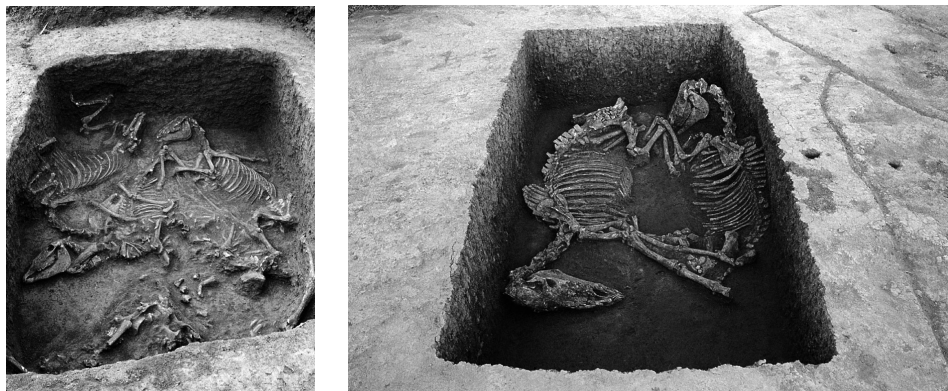


図2 少陵原西周墓地1号殉馬坑(左)と3号殉馬坑(右)

はっきりしない。しかしながら、各墓域の墓をみまると、Ⅲ区のM280からは北方系青銅文化の要素をもった青銅短剣が、M96やM233からは青銅製車馬器やウ

シの肩胛骨をもちいた卜骨をともなうなど、副葬品に特徴のある墓が集中しており、それぞれ1、2号馬坑に隣接している(図3)。Ⅴ区には特徴的な副葬品をもつ墓が

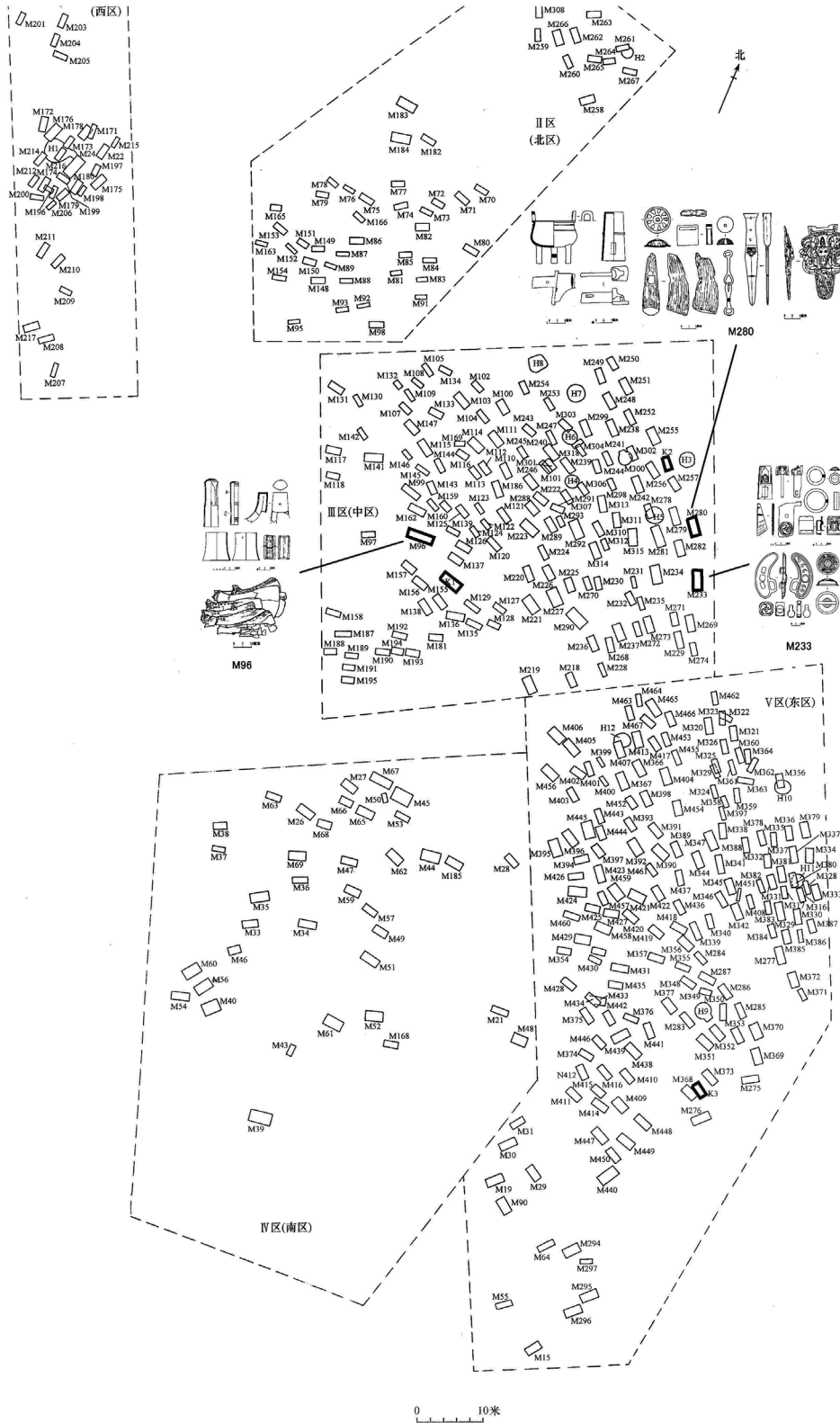


図3 少陵原西周墓地墓葬分布

みとめられないことから、Ⅲ区は上位階層もしくは中心的な役割を果たしていた人間の墓域と考えられる。そのため、同じウマの犠牲であっても、Ⅲ区の上位層の被葬者には貴重な幼獣のウマが、Ⅴ区の下位層の被葬者には老齢のウマが捧げられたと推察される。また、1号馬坑の埋葬前に木板または草木が敷かれていた痕跡が確認されている。2、3号馬坑と比べてより丁寧^{とぼり}に葬られたことが窺える。ウマの犠牲にともない墓底^{むしろう}に蓆などを敷く行為は、周の中心地のひとつと考えられている、周原遺跡莊李西周墓より出土した車馬坑の墓底に同様の痕跡が認められる¹²⁾。『禮記』檀弓下第四には「敝帷不棄、為埋馬也」とあり、ウマを埋葬するにあたり、帷^{とぼり}や蓆^{むしろ}といった敷物を敷いて埋葬することが記述されている¹³⁾。このことから、少陵原西周墓地殉馬坑にみられる事例は、西周王朝におけるウマの埋葬方法を考えるうえでも注目すべき点であろう。

中国においてウマの家畜利用が確認されているのは、河南省安陽市の殷墟遺跡や陝西省西安市老牛坡遺跡を代表とする殷代後期からである。本遺跡は、王陵と考えられる墓域が発見された周公廟遺跡や周原遺跡など、周の本拠地と考えられる地域に近い。また、出土した北方青銅器などから、草原地域との強いつながりも窺い知ることができる。そして、当時貴重な家畜であったウマを中心的な都市以外の、しかも一般集落の墓地において犠牲としていたことを明らかにできたことは、西周王朝におけるウマの生産体制を考えるうえで重要な資料を提示でき、さらなる詳細な調査により、より具体的な周王朝におけるウマの利用形態を復元することを可能にすることができる。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より平成22年度学術研究奨励金を賜りました。現地調査にあたっては、陝西省考古研究院の劉呆雲氏、曹龍氏にご協力いただきました。また実際の作業では、東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程の覚張隆史氏にご助力いただいた。末筆ではございますが、感謝申し上げます。

文 献

- 1) 陝西省考古研究院：少陵原西周墓地、科学出版社、2009.
- 2) Driesch, A. von den : *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*. Peabody Museum Bulletins 1 Harvard University, 1976.
- 3) 林田重幸・山内忠平：鹿児島大学農学部学術報告，6, 146 - 155, 1957.
- 4) 西中川駿ほか：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究 平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書、1991.
- 5) Cornwall I.W.: *Bones for the archaeologist* J.M.DENT & SONS LTD, 1956
- 6) 北京市文物研究所：瑠璃河西周燕国墓地 1973 - 1977、文物出版社、1995.
- 7) 北京大学考古学系商周組・山西省考古研究所：天馬一曲村 1980 - 1989、科学出版社、2000.
- 8) 中国科学院考古研究所：上村嶺虢国墓地、中国田野考古報告集考古学専刊丁種 第10号、科学出版社、1959.
- 9) 周本雄：太原晋国趙卿墓，248-252、文物出版社、1996.
- 10) 菊地大樹：中国考古学，9, 27 - 48, 2009.
- 11) 河南省文物考古研究所：新鄭鄭国祭祀遺址、大象出版社、2006.
- 12) 周原考古隊：考古，12, 3 - 22, 2008.
- 13) 竹内照夫：新釈漢文大系 礼記 上、明治書院、1977.